

すっかり変わってしまった。浮島で製塩が行なわれたとは
いっても信じられないほどである。かつての交通路、物
資輸送、外海との往来、製塩等において、霞ヶ浦がはた
してきた役割は完全に姿を消してしまつたが、農業、漁
業、畜産業については依然として霞ヶ浦の果す役割は大
きい。しかし、昔を今にしのぶことができない程霞ヶ浦
とその周辺環境破壊は急激に進んでしまつた。

「右に筑波山、左に富士山、ここは花」と水郷の美を
「天下に冠たり」とたたえた大正の文豪がいたが、今は
この風光を目に浮べることはとてもできない。笠間稲荷
に詣うで土浦から汽船に乗り、霞ヶ浦に映える筑波山
をみながら潮来に行き、鹿島神宮に参拝するという信仰
深い人達が通つたコースも今ははやらない。夏の霞ヶ浦
は緑黄色に濁り、湖面に筑波山が映えるどころか、時と
しては悪臭が鼻をつく。

親鸞上人が舟に乗つたという高浜の港は、養豚や食品
工場のくさつたドブ川が流れこんで黒くよごれている。
霞ヶ浦を中心に今流の表現をみると、『北に筑波学園都
市、南に鹿島工業地帯、ここは水がメ、どぶ地化』とで

もいえるかもしれない。

霞ヶ浦をはさんで県南にしめるこの二つの広大な地域
には人口集中がはじまり、昭和六十年には一三〇万人の
人口が集中するとみられる。そして、その時も霞ヶ浦の
水は一三〇万の人間の生活を支えるための必要不可欠の
役割を荷負わされているのであるが……。

二、霞ヶ浦と人の生活

霞ヶ浦は琵琶湖に次ぐ我が国第二位の大きな淡水湖で
ある。さきに述べたように数百年前は海であつたことか
ら海跡湖と呼ばれる。湖と沼の違いは大ざっぱにいつて
中心部まで水草が生えているかないかで分けられてい
るが、霞ヶ浦は平均水深四メートルで中心部近くまで水
草が生えている。つまり沼に近い湖なのである。霞ヶ浦
の面積は西浦一七四平方キロメートル、北浦三六平方キ
ロメートル、容積八、六億トン、年間一四億トンの水が
流出している。つまり半年で一回づつ霞ヶ浦は空っぽに
なり、一年で二回入れ替ることになる。霞ヶ浦はよく琵琶
湖と比較されるが、琵琶湖の平均水深は四一、二メー